

## 57. 札幌市認可保育園児における感染症罹患状況の検討

楠 幸博、小笠原由法、出村 守、飯塚 進

### 【はじめに】

2017年札幌市認可保育園における急病時の対応と感染症対策に関して、園管理者を対象にアンケート調査を行なった。保育園の呼び出し基準にはばらつきがあり、予防接種の推奨が不十分であった。2018年は札幌市認可保育園の保護者に対して、保育園児の罹患疾患についてアンケート調査を行なった。

### 【方法】

研究責任者（楠）が園医である4施設の保護者全員を対象として、アンケート用紙は園児につき1枚配布した。調査期間2018年9月から10月とした。

### 【結果】

合計定員323人中174人から回答（回収率54%）を得た。年齢構成は0歳2%、1歳17%、2歳16%、3歳20%、4歳19%、5歳19%、6歳6%であった。年齢は0-1歳、1、2、3、4、5-6歳がほぼ同数なので、6つのグループで検討した。誰が呼び出された時に迎えに行くかは、母93%、父24%、母方祖母20%、母方祖父8%、父方祖母8%、父方祖父1%、であった。父親の育児参加は未だ不十分であることが示された。2018年4月から8月までの期間で、呼び出しの原因は発熱89%、下痢6%、嘔吐7%、外傷5%であった。保育園からの呼び出しに対する親の評価は早すぎる5%、丁度いい94%、遅すぎる1%で、概ね満足していた。この期間の多い時の呼び出し回数は、週2回以上3%、週1回3%、月に2回以上

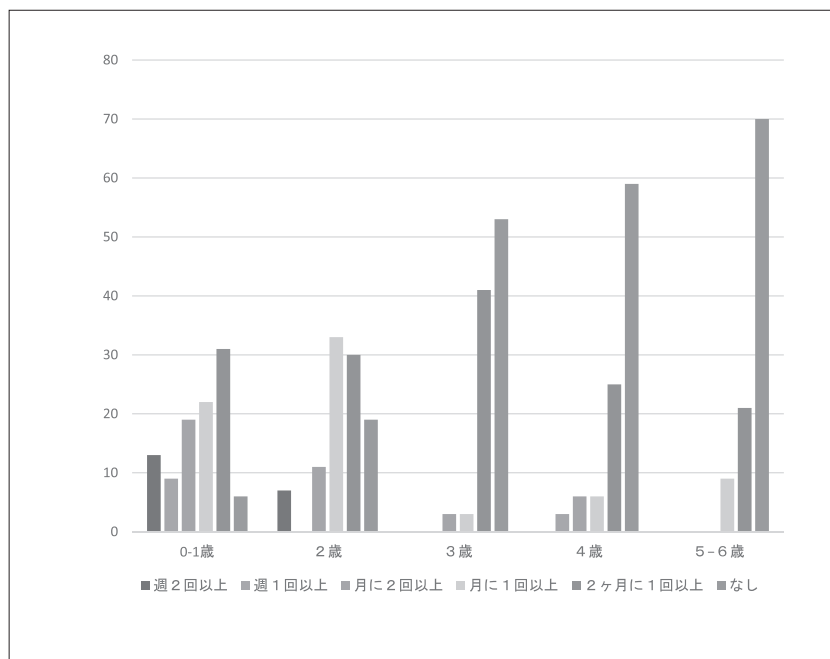


図1 年齢別呼び出し回数（2018年4月から8月まで%：年齢別グループで合計100%となるように示した。）

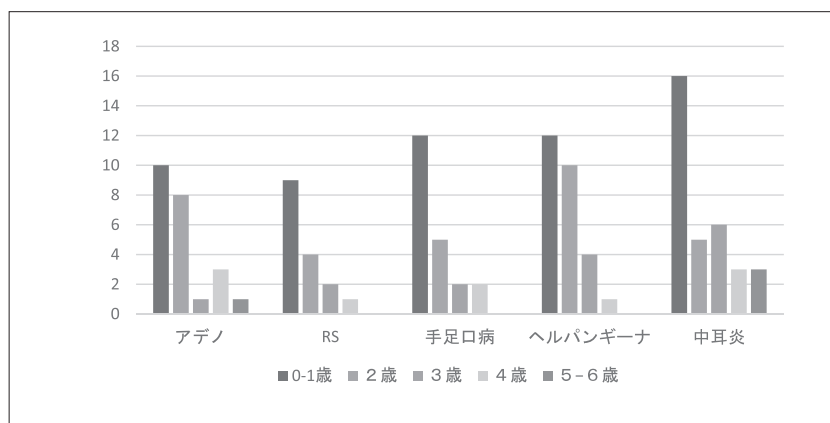


図2 年齢別罹患数（2018年4月から8月まで）

7%、月に1回15%、2ヶ月に1回15%、なし41%であった。年齢的に分類し、各グループの合計が100%となるようにグラフ（図1）にして示した。3歳すぎると呼び出し回数は有意に減少しているのが明らかとなった。

発熱の原因はウイルス感染症が主であると想定される。2018年4月から8月までに流行した感染症（アデノウイルス感染症、RS感染症、手足口病、ヘルパンギーナ）について年齢別罹患数を図2に

示した。3歳くらいまでが大部分を占めていた。また同時期中の中耳炎罹患数も同様傾向であった。

入院歴がある園児は48人(29%)で、原因の内訳はロタウイルス胃腸炎3人、RS感染症3人、肺炎4人、気管支炎3人、気管支喘息発作2人、クループ2人、食物アレルギー2人、外科的手術9人(停留睪丸、外傷、先天性心疾患、鼠径ヘルニア2、二分脊椎、チュービング)であった。定期的に通院している診療科は、小児科21人(原因は気管支喘息7人、食物アレルギー6人、湿疹5人、便秘症2人、先天性心疾患術後、水腎症)、耳鼻科26人(中耳炎19人、副鼻腔炎6人、アレルギー性鼻炎3人)、皮膚科20人(湿疹19人、伝染性軟属種1人)、眼科4人(斜視、乱視、弱視、麦粒腫)であった。既往歴は中耳炎60%、肺炎3%、気管支炎22%、胃腸炎49%、RS 46%、食物アレルギー11%、川崎病1%、湿疹42%が罹患していた。この中では中耳炎、胃腸炎、RS、湿疹の罹患率が高かった。

予防接種の接種率は肺炎球菌ワクチン97%、ヒブワクチン97%、4種混合98%、ロタワクチン83%、BCG94%、はしか風疹ワクチン92%、水痘ワクチン84%、おたふく風邪ワクチン69%であっ

た。定期の接種率は90%以上であったが、任意の接種率はもう少し改善が必要で、保育園での推奨も重要と考える。任意のロタワクチンは高価で、以前は50%程度の接種率であったが、今回は明らかに上昇しており、ワクチンの有効性が認知されてきたと考える。

### 【まとめ】

1) 保育園に行き始めの2年間は1ヶ月1回以上、主に発熱のために呼び出されているが、3歳すぎると回数は減少する。低年齢児はウイルス感染症に対して感受性が高いので、流行するウイルス疾患にかかりやすく発熱が出やすい。2) 鼻水をきたすかぜ症候群を繰り返すので、中耳炎を合併することが多く、耳鼻科通院となりやすいと考えられる。3) 呼び出し回数を減少させるためには、予防接種を適切に行うことが重要と考える。4) 保護者は呼び出しの主な原因となる発熱、嘔吐、下痢への対応の仕方を理解し、さらに入園後に多く見られ、大人では多くないRS感染症、胃腸炎、中耳炎に対する知識を得ることが望ましいと考える。